ヴィルヘルム・マイスターの修業時代の『塔の結社』について

Über die Turmgesellschaft in „Wilhelm Meisters Lehrjahren"

中島明彦

一

ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』は、未完の『ヴィルヘルム・マイスターの演劇使命』を新たなる構想の下に書き直したものである。『演劇使命』では、ヴィルヘルムの演劇とのかかわり合いが扱われていた。彼が演劇世界とかかわり合いながら暗中摸索する姿が描かれている。市民階級出身の彼は、演劇の中におのれの生きる道があると思い、さまざまな努力をする。しかし絶えず幻滅を味わい、果たしてこれが真の生きる道かと疑う。こういう苦闘している彼の姿が描かれている。そしてそれから先の見通しは明らかではない。ゲーテが筆を止めた所は、ヴィルヘルムが優れた演劇人であり、また座長でもあるゼルロの所でいよいよ演劇人として働こうと決めた所である。しかしこれから先彼がそこで真の充足した生を送るかどうかはっきりしない。この小説では一貫して、夢と幻滅の間を揺れ動くヴィルヘルムを見せている。ゲーテが筆を止めた所までそうだったのである。

そこでゲーテが新たにこの作品を取り上げた時、全体のまとめとなる新たなるイデーが必要だった。それが『塔の結社』という秘密結社めいた集まりだった。これは優れた選ばれたエリートの人々の集まりであり、その人々がヴィルヘルムの人生の歩みを見守り、導くのである。『塔の結社』は『演劇使命』には全くなかったものである。そしてここに『塔の結社』というモチーフでもって小説がまとめられ、完成した。あるいは別の言い方をすれば、ゲーテには改作の時もうヴィルヘルムの『演劇使命』が中心ではなくて、彼の人間としての成長がテーマになり、その為『塔の結社』という秘密組織めいた集まりのモチーフを利用した。そして『ヴィルヘルム・マイスターの演劇使命』は、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』という教養小説に生まれ変わった。

ところで『塔の結社』という秘密組織は我々にとってひどく奇異なものに見える。彼等はヴィルヘルムの行動を見守り、導いている、あるいは「導いていると称している」(1)

このような、個人の生活の一部始終を密かに見守り、その人を指導するという話は異様だ。本人の知らぬ所でその人を見ている者がある、いや、ひそかにその人を導いている、という話は薄気味悪い。

ところでゲーテはこのモチーフでもってひどく変わった事をした訳ではない。

「ゲーテの同時代の人々にとってはこのモチーフは今日の読者ほど異様なものではなかったという事を思い出さなければならない」[2]

とStaigerが述べているように、実に一八世紀後半のドイツでは秘密組織をテーマにした小説が流行していた。古典ドラマの神のごとく、ある人物をよき目的にしろ、悪しき目的にしろ導く運命的な力をもった秘密結社が小説の題材に選ばれた。

一八世紀に秘密結社小説が流行したが、それはとりもなおさず当時の社会状況を反映していた。当時はフリーメーンソンリーを中心にしてさまざまな秘密結社が各地で作られ活躍した。啓蒙主義の時代はフリーメーソンリーの発達にちょうどよい土壌を提供した。フリーメーソンリーは、寛容、人間の自由な発展、同胞愛、他人に対する援助、平等などの理想を、優れた人達の集団によって広めるのを目的にした。他方この時代では、理性を掲げながらまた奇跡、神秘など非合理を求める傾向が強く、フリーメーソンリーの持つ古い秘儀みたいなものに惹きつけられた。

フリーメーソン（freemasonドイツ語ではFreimauer）は中世の石工の事であった。彼等はギルド的な「会所」を持った。だが今問題にしている形でのフリーメーソンリーは、一七一七年ロンドンで四つの会所が合併して、大会所ができたという事実をもって最も古い記録とする。それが上述したように啓蒙主義の時代精神に合致し、やがて時と共に各地に会所をもつようになって、それは全世界に広がった。それにはプロイセンのフリードリヒ大王等、王侯や、多数の学者、知識人、芸術家などが加わった。

ゲーテのいたワイマールでも、アウグスト公の母君、アマーリア公妃が会所を持った（一七八〇年）。そしてこれには大公もゲーテも入会している。ゲーテの入会の動機は「社交的」な目的にあり、決して熱心に運動に共鳴したというほどではない。そして後にはフリーメーソンリーに対して冷ややかな否定的な態度をとるようになる。

フリーメーソンリーについては、菊池栄一氏の「ゲーテの世界」[3]で扱われている。しかし秘密結社小説については触れていない。Rosemarie Haasは、フリーメーソンリー、秘密結社小説、又『修業時代』の秘密結社小説との位置付けについて詳細、綿密な考証を行っている。[4]特に日本人にはなじみの薄いフリーメーソンリーの儀式などがゲーテの作品にどの位利用されているかという点で貴重な示唆をえた。以下Haasを参考にしながら、『塔の結社』がヴィルヘルムをどのように導いたか、検討する事にする。

《秘密結社小説》について。

秘密結社をテーマとする小説の先駆者は、Haasはフランスの教育小説Fénelonの「Avantures des Télémaque」（一六九九年）としている。この小説の主人公の運命は、揺るぎなき権威を持つ師Mentorの手中にある。それに続くのがフリーメイソンであったRamsayの「Voyages de Cyrus」（一七二七年）である。そしてTerrasonの「Sethos」で本来の意味の秘密結社小説になった。Sethosは教育者Amedesによってユートピア風の国に案内される。

これらの作品はドイツ語にも翻訳された。しかしそれが大きくドイツ文学に影響を与えるには至らなかった。

ドイツではこの世紀の中頃からフリーメーソンリーを題材にした小説が現れた。それらは偽りの会所に注意し、正しい会所に導くという内容のものである。文学的価値は低い。

ドイツでの秘密結社小説を文学的に高い水準に上げたのはシラーである。彼の「招魂霊術師」(一七八六年—一七八九年)では、或国の王子の改宗をテーマにしている。一国の主の宗教が変わるとその国の人民も倣って改宗する事があるから、君主の改宗は大問題である。

この作品のストリーは、ある国の王子をプロテスタントからカトリックに改宗させる話である。ここに神秘的な詐欺師のアルメリア人を首領とするカトリックの秘密組織があった。彼等は王子を改宗させる事によって自分達のいいなりになる道具を得ようとする。そしてとうとう巧妙な策略を用いて王子の改宗に成功してしまう。ここでアルメリア人は王子の運命を動かす力を持っている。

シラーの「招魂霊術師」は大成功を収めた。それに刺激されていくつかの「秘密結社」小説が生まれた。たとえば Jean Paul の初めて出版された作品は「目に見えない会所」(Die unsichtbare Loge)というのである。

二 『塔の結社』の指導について

『修業時代』の『塔の結社』は二つの機能を持っている。前半ではヴィルヘルムを導く働きをし、後半ではヴィルヘルムが『塔』で修業証書を受理して彼の教育がある意味で終わってからは彼に結社の一員として活動の場を与える所である。

本論では、ヴィルヘルムの指導という面に限定して考察する。

『修業時代』は八巻からなっている。『演劇使命』は手直しされながら第五巻の初めまでに収められた。第六巻は、「美しい魂の告白」に与えられ、第七巻と第八巻が『塔の結社』に与えられている。

『演劇使命』には『塔の結社』はなかった。『演劇使命』の中に現れて殆どそのままの姿で『塔の結社』の一員として姿を見せるのはヤルノー一人である。ナターリエは『演劇使命』ではまだ単にアマツォーネとしてのみ登場するに過ぎず、ロターリオに至ってはその姿は見せずロタールという名で、アウレリーの話の中に出て来るだけだ。彼等は『修業時代』で、『塔の結社』の一員という見地から新たにその性格を与えられている。しかしいずれにしてもヴィルヘルムとは第七巻以降密接に接触する。

ところでここに彼等とは全く性質の違う機能を果たす人物がいて、ヴィルヘルムと偶然のごとく会い、話し合い議論し、あるいは教えようとする。この人達は一回ヴィルヘルムと出会った後はもう一度「塔」の中で姿を現すだけだ。ヴィルヘルムと生活を共にする事はない。実はこの人達はヴィルヘルムを導く為『塔の結社』から派遣された使者であった。それは四人いて、(一)芸術愛好家、(二)田舎牧師、(三)見知らぬ士官、(四)ハムレットの父王の亡霊である。

そして初めの(三)までは、第三巻まで、即ち『演劇使命』として出来上がっていた部分に新たに押し込められたものである。(四)のハムレットの父王の亡霊は第五巻に現れる。『演劇使命』は素材として第五巻の初めに尽きてしまった。従ってヴィルヘルムによるハムレットの上演からは新たに書かれた。それでハムレットの父の亡霊は筋の展開

に関係している。今までの三人と比べて筋の上で唐突ではない。しかしいずれにせよこの四人は突然姿を見せたが、それっきり消えてしまって、ずっとヴィルヘルムと接触することはない。そしてやっと終わりの「塔」の場面で、この順にヴィルヘルムに姿を見せて、すべての出来事が一つのつながりがある事を教える。

さて、(一)から(三)までの人物が現れる場面は、ある共通性がある。(a)彼等の出現が唐突である事。(b)彼等はヴィルヘルムに教訓警告を与えるがそれがヴィルヘルムには印象を与えず、従って彼等はヴィルヘルムのその後の行動に影響を及ぼさない事である。普通の秘密結社小説では、結社からの働きかけは主人公の行動を左右する力があるからゲーテの場合は随分趣を異にしている。その状況を簡単に触れてみる。

(一)　芸術愛好家

ヴィルヘルムが恋人の女優マリアーネの所から夜帰って来るとき街で一人の芸術愛好家に会う。この人は実はヴィルヘルムの祖父の芸術コレクションを知っていた。そこで二人は芸術について話し、議論する。この箇所はそのすぐ前のヴィルヘルムとマリアーネとの愛の物語とは何の関係もない。もし作品の終わりからここを振り返らなかったらその必然性を疑われるであろう。そうやってみて、この芸術愛好家はヴィルヘルムに教訓を与える役を果たしているのが分かる。

ヴィルヘルムは自分を導く運命を信じている。そして彼は自分の好きな演劇に進むのが運命の導きだと思っている。

「……自分に最善のものをもたらし、また誰にでも最善のものをもたらす運命というのを信じる気になります」

「あなたのような若い方からまたしても運命という言葉を聞くのは、またしても残念な気がします。だれにしても、自分の好きほうだいの事をして、それを神の意志を実行したのだとうそぶいて当然の年齢じゃありませんか」

「では、あなたは、運命をお信じにならないのですか。ぼくたちを支配し、ぼくたちの為に最善を計ってくれる力をお信じにならないのですか」

「……世界は、必然と偶然が織り成している織物です。人間の理性は、その間にあって両者を統御する事ができます。理性は必然をみずからの存在の根拠にします。そして偶然を導き、制御し、利用するのです。……若い頃から必然の中に恣意的なものを見る事に慣れていたり、偶然に一種の理性を与え、それにしたがう事が宗教であるなどと考える人は、なんとも困ったものです[5]」

この会話からも明らかなようにこの芸術愛好家は、ヴィルヘルムが運命と思っている事は偶然にすぎないと知っている。そこで彼にその考えの誤りを教える。だがそれはヴィルヘルムに一向に印象を与えないし、彼の行動を変える働きもない。ヴィルヘルムが自分の誤りに気付くのはずっと後の「塔」においてである。そこで彼はやっとこう述懐する。

「偶然の出来事がつながりをもつのだろうか？　そしてわれわれが運命と呼ぶものは単に偶然にすぎないのか？[6]」

(二)　田舎牧師

ヴィルヘルムが旅回りの役者達と船遊びをする。その時偶然のごとく一人の田舎牧師が合流する。やがて陸に上がって散歩する時ヴィル

ヘルムは牧師と二人だけになり、ここで芸術について論争する。その際ヴィルヘルムは牧師が自分の少年時代の人形芝居熱を知っているらしいのに驚かされる。ここで交わされた議論の問題点は、ヴィルヘルムは俳優の素質、天才を信頼しているのに対して、牧師は正しい教育や習練の必要性を説く。

「しかし、正しい習練や教育、それも早期の習練や教育によって芸術家の中から素質の芽を引き出してやらねば、その芸術家は初めと終わりの中間の所でいろいろ大事なものを得られない事になるでしょう」(7)

「ところが不幸にも偶然がその若者を人形芝居に近づけたとします。そこで、彼は早くからくだらない、趣味の悪いことに興味をもたざるをえなくなり、馬鹿げたものをそうひどいとも思わなくなり……」(8)

この牧師の話もヴィルヘルムの考えを変える事はなかった。

（三）見知らぬ士官

見知らぬ士官の場合は、ヴィルヘルムとの邂逅は、ほんの一瞬であった。この士官は風のごとく馬に乗ってやってきて、また走り去った。

ヤルノーがヴィルヘルムに旅回りの役者達から去るように忠告する場面がある。そのヤルノーの忠告にヴィルヘルムは一応感謝する。しかしその感謝の気持もそれに続くヤルノーの、堅琴弾きやミニョンに対するシニカルな言葉、「きみが何とか食っていくために、流しの堅琴弾きや、ばかげた、男だか女だかも分からぬ子供をだいじにしているのを見ると、しばしば吐き気をおぼえ、不愉快になったのです」(9)に、ヴィルヘルムはひどく心を傷付けられて呆然としてしまった。その時一人の見知らぬ士官が馬で駆けつけて来て、ヤルノーと一言、二言ことばを交わす。それから彼は、ヴィルヘルムに、あなたの事に関心を抱いている者だと称し、ヤルノーの忠告に従うよう言って去っていく。こうしてまたヴィルヘルムは彼の方では知らないが、自分の事情をよく知っている人、即ち秘密結社の一員から忠告を受けるのである。もちろんこの場合もこの忠告は実らない。

「初対面の士官から受けた奇妙な抱擁は、それほど気にならず、彼の好奇心と想像力をほんのちょっと刺激しただけだった」(10)

（四）ハムレットの父王の亡霊

ハムレットの父王の亡霊は『演劇使命』にはなかった部分である。ヴィルヘルムがゼルローの劇場でハムレットを企画した時、亡霊を演じてくれる適当な俳優がなかった。彼等が困惑している時突然亡霊については心配しなくてもいい、当日必ず来るから、という紙片が彼のテーブルの上に発見された。そして実際当日亡霊が現れた。その過程は秘密めいていてそしてどこか神秘的であり、確かに秘密結社小説風である。

この「亡霊」は約束通り現れ、見事に父王の亡霊の役を演ずる。そしてまたその正体を明かすこともなく消えてしまう。しかし彼が残したヴェールの中に警告の紙片があった。

「最初にして最後の忠告……逃げたまえ、若者よ、逃げたまえ！」(11)

この亡霊は『塔の結社』から派遣された使者であった。そして再びヴィルヘルムに劇場から去るよう忠告する。だがヴィルヘルムはそれに従わない。その後も劇場に携わっている。

この事について後に「塔」でヤルノーがヴィルヘルムに言っている

通りである。

「それでヴェールを後に残して、ぼくに逃げろと指示されたわけですか？」

「その通りです。それどころか、あの人（神父）は、ハムレットの上演とともにきみの芝居熱もすっかり冷めてしまうのを望んでいましたよ。これが終わったらきみは二度と舞台に立つ事はあるまい、とあの人は言いました。ぼくの考えは正反対でしたが、どうやらぼくの方が正しかったようです」[12]

こうして考察してきた通り、教育的目的で秘密結社から派遣された使者達は結局主人公を導く事はできなかった。他の秘密結社小説の場合はそのような人々は主人公の運命を動かす力をもっているのに。

そうすると、しばしば『塔の結社』によってヴィルヘルムが導かれたと言われているのはどういう事か？彼が「塔」で彼の経歴を書いた巻物を手にした時の気持ちはこう表わされている。

「これまで自分では自由に、誰からも監視されずに振る舞ってきたつもりだったのに、巻物からはっきり分かるように、自分の生活のこれほど多くの事情が観察され、それどころか指導されていたのだと思うと、あるいは一種の不快感をおぼえずにはいられなかったのかも知れない」[13]

ここで言う指導というのは、他の秘密結社小説でいう指導とは全く違う性質のものである。それは迷い、過ちの中に人をおく事こそ本当にその人の為になるという考えである。塔の場面で田舎牧師が言っている。

「人間を教育する者の務めは、間違いを犯さないように守ってやる事ではなく、迷っている者を導いてやる事です。それどころか、なみなみとそそがれた迷いや間違いの杯を何杯でも飲み干させてやる事が、教師たる者の務めです」[14]

またヤルノーは同じような神父の考えをヴィルヘルムに伝えている。

「神父はこう主張しています。《誤りは迷うことによってのみ直される》と」[15]

誤りはたっぷりとその誤りを経験して初めて直されるというのはゲーテの信念だった。従って『塔の結社』から派遣された使者がヴィルヘルムに適切な助言を与えていても、実際的な効果を生まなかった。しかし彼等の出現は無意味であったというのではない。確かにヴィルヘルムには実際的な力を持たなかったが、ヴィルヘルムの現状を明らかにする働きをした。

さて最後に初めの問題に立ち返って、『塔の結社』という秘密結社は薄気味悪いかどうかという事に触れておく。今まで見てきたことで明らかなように、『修業時代』の中の『塔の結社』は人間的に優れた人々の集まりであり、ヴィルヘルムの人間としての成長に関心を抱いている好意ある人々である。そして彼等は自分の考えをヴィルヘルムに無理強いしていない。彼の運命を強引におのれの思うように引っ張っていない。他の秘密結社小説のように揺るぎない権威で主人公を導くのでもなく、陰険な目的で自分の都合のいいようにひきづり回すの

でもない。しかしそれにもかかわらずある種の薄気味悪さを払拭できないのは、ある個人の人生の歩みが隠すことなく知られてしまうということからきているのだろう。ゲーテが『塔の結社』という秘密結社のモチーフを選んだ時それは避けがたい運命だったのである。

注

(1) Staiger, E: Goethe II, Zürich 1958, S. 152
(2) ebd, S. 152
(3) 菊池栄一。ゲーテの世界。東京大学出版会。1953, S. 123 ff.
(4) Haas, R: Die Turmgesellschaft in "Wilhelm Meisters Lehrjahren" Frankfurt, 1975
(5) Goethes Werke Bd. 7, Wilhelm Meisters Lehrjahre. Hamburg 1950 以下 LJと表す. S. 71
(6) LJ S. 494
(7) LJ S. 120
(8) LJ S. 122
(9) LJ S. 193
(10) LJ S. 194
(11) LJ S. 328
(12) LJ S. 550
(13) LJ S. 505
(14) LJ S. 494
(15) LJ S. 550